

景泰政權の成立と孫皇太后

荷 見 守 義

はじめに

景泰帝⁽¹⁾朱祁钰は明朝第五代宣德帝の次子で、第七代の皇帝、母は呉賢妃である。第六代英宗は「異母兄」に当たる。景泰帝の即位は、土木の変から二一日後の正統一四年九月六日のことであつた。土木の変後の明朝宮廷（以下、明廷）における政局展開の中から生じたその即位と政權形成に向けた動きは、本事変の必然的・不可避免的な帰結であつたのではなく、打算と妥協で紆余曲折した変後の政局展開の結果であつた。その故に、景泰帝の即位とその政權成立の由来を説明しようとするならば、皇帝不在の状況下で展開された変後政局そのものを分析する必要がある。さらに当該時期の政局において、キーパーソンであつたのは、正統中期以降、明廷において隠然たる影響力を保持してきた宣德帝の皇后で、かつ英宗の「生母」たる孫皇太后（以下、時期によって孫皇后）であつた。

そこで本稿では、正統から景泰を挟み、天順年間に至る政治過程を分析していく上での基本視点を定める一つの試みとして、従来専論のない変後の政局について、景泰政權成立と孫皇太后の關係に論点を絞⁽²⁾り、景泰帝即位に収斂していった移行期の明廷政治の動態的把握を試み、併せて皇權を取り巻く皇族、外戚、宦官、廷臣の問題につい

て検討してみたい。

一、英宗政權をめぐる孫皇太后とその一族

土木の変以降の明廷政治の動向を分析する前提として、本節では英宗即位以降、正統年間における孫氏一族の明廷での位置付けを検討する。

英宗は宣德一〇年正月、宣德帝崩御を受けて、数え僅か九歳で即位した。明朝始まって以来の幼帝であつたため、輔佐の良否が明廷の動向を左右するようになった。最初は宣德帝の遺詔⁽⁴⁾によって、国家の重事は張太皇太后（以下、時期によって張皇后、張皇太后）と孫皇太后に上申することになった。特に洪熙帝の皇后であつた張太皇太后は、英宗の東宮時代からの師たる太監王振の伸張を厳しく押さえ、閣臣たる楊士奇、楊榮、楊溥の所謂「三楊」に英宗の輔佐を命じた。永樂帝が腹心を閣臣に拔擢して以来、皇帝の政治顧問として実体を有するようになりつつあつた内閣は、洪熙・宣德の時代に、閣臣の多くが皇帝の信任を得て加官され、明廷において重きをなすようになり、次第に六部を圧するようになった。⁽⁵⁾三楊は英宗が幼帝であることに鑑み、朝議の方式に変更を加え、上奏文に關して予め閣臣が條旨を用意する閣議處理方式を定制度化させた。これによって内閣の權威は一層高まつたものの、一方では、朝議での上奏・降旨の著しい形骸化が進行し、また上奏文の移送過程に内官が介在する余地が生じ、以後の宦官専横の素地となつた。⁽⁶⁾かくして正統前半期においては、張太皇太后と三楊の睨みが効いていたので、王振を始めとする宦官勢力の伸張は押さえられた。しかし、正統七年一〇月、閣臣の最大の後ろ盾だつた張太皇太后が逝去し、ま

た三楊も、正統五年七月に楊榮が、九年三月に楊士奇が、一一年七月に楊溥が相次いで死去すると、英宗の信任厚い王振が明廷政治を壟断し始めた。三楊後の閣臣は、正統五年二月、翰林院侍講學士馬愉、翰林院侍講曹鼎、正統九年四月に翰林院學士陳循が入閣した。さらに、正統一〇年一〇月に翰林院侍讀學士苗衷、翰林院侍講學士高穀が入閣し、同時に閣臣全員は加官されて正三品となった。また、正統一四年五月には侍讀學士張益が入閣した。以上は全て翰林院出身で、馬愉、曹鼎、陳循が状元出身、苗衷が榜眼出身など、科擧のエリートであったが特段の後援もなく、王振に抗することはできなかった。

王振の専權振りについては、従来の宦官研究⁽⁷⁾において、夙に注目されてきたが、その一方で孫皇太后とその一族の抬頭については、余り触れられて来なかった。しかし、張太皇太后の逝去後、英宗を後援する地位を引き継いだのは孫皇太后にはかならなかった。孫皇太后は（河南歸德府）永城県主簿孫忠の女で、後宮に入った後、宣德帝の即位により貴妃に封ぜられた。当時の皇后は胡氏であった。次いで宣德二年十一月、孫貴妃として第一子を産むと、三年三月に病弱で子供のない胡皇后に代わって皇后となった。さらに英宗の即位に伴い皇太后となっていたが、張太皇太后逝去によって始めて國權が彼女の手中に歸した。張太皇太后は遺詔で、「宮中の大小の庶務は、悉く皇太后に奏して行え。諸后妃家は並びに須らく皇祖の訓戒を遵奉し、國政に干預するを許さず⁽⁸⁾。」と指示した。この孫氏は權勢に対する応じ方で、張氏と體質的な違いがある。張氏は身内の引き立てに慎重⁽⁹⁾で、かつ内閣を後援して宦官の勢力伸張を抑制したのに対し、孫氏の場合は父親に爵位が与えられた外、その子・孫にも武功無くして次々と錦衣等の官が与えられ、一族の勢力は着実に拡大した。また、宣德年間に孫忠の下僕が私塩に従事して訴えられた

一幕も示唆的である。では孫氏一族と王振の力関係はどうだったのだろうか。王振の横暴は張太皇太后逝去を機として酷くなる。しかし、王振は孫一族を圧倒し得たかと言えば、それは不可能であった。それは次のエピソードに如実に示されている。孫皇太后の父孫忠は、娘が皇后となると、皇后の父親としては初めて爵位を与えられ、会昌伯となった。正統八年七月、国子監祭酒李時勉は王振の意に逆らったことから、国子監の門前で枷に繋がれ、見せしめとされた。これを救おうとした国子監の師生が騒ぎだし、孫忠に訴えた。彼は即座に孫皇太后に附奏して善処を要請した。そこで孫皇太后は英宗に事の子細を問い質したところ、英宗は何も知らなかったことを白状して陳謝した。それで孫皇太后は英宗に「知らずして何が皇帝か」と詰問した。間もなく王振が勝手に行ったことであることが分かり、李時勉は救われたのである。⁽¹⁰⁾ 世事に疎い英宗に付け込んで威を張る王振も、英宗を直接動かし得る孫一族には及ばず、孫皇太后の意向に背くことはできなかったのである。

二、変後明廷の求心力——南遷の議をめぐる——

正統一四年七月の英宗による親征は、直接的にはその直前に起こったオイラートの明北辺への大規模進攻に対処するものであったが、英宗と王振の功利心による計画的親征であったことはすでに明らかに⁽¹¹⁾なっている。しかしこの五〇万に上る親征軍は、出軍して一カ月後の八月一五日、土木堡においてオイラート軍の急襲を受けて壊滅した。オイラート軍は僅か二万であったと言われている。親征軍壊滅後、明廷では、エセンの下に拉致された英宗の後をどうするか、オイラート軍の進攻をいかに凌ぐか、という難題に直面することになった。本節では南遷の議、つま

り京師たる北京から南方に退避すべきかどうか、をめぐって揺れ動いた明廷の様相を通して、変後の明廷の求心力について検討する。

京師に親征軍壊滅の報が齎されると、人心は激しく動揺したという。実録によれば、当時の京師には一〇万程の軍隊しか残っていなかった。明廷ではこのような状況に直面して、早速戦守をめぐる朝議⁽¹²⁾が開かれたものの、浮足立ったまま容易に決さなかった。この状況下で翰林院侍講徐有貞（当時徐理）から南遷が提議された。これに対して、太監金英と宦官興安はこの論を拒み、続いて禮部尚書胡濙、刑部侍郎江淵は「文皇帝（永樂帝）の陵墓がある北京を捨てるべきではない」と主張、兵部侍郎于謙は「速やかに勤王の兵を募って北京を死守すべきであり、南遷を唱える者は斬るべきである」と言い、翰林院學士陳循も于謙の發言を支持し、結果的に南遷は回避された⁽¹³⁾。以上から見れば、徐有貞の議論は総攻撃に晒された感があるが、明廷内外で案外心情的共感を得ていたのではなからうか。徐有貞は天官、地理、兵法、水利、陰陽方術等の書に通じていたと言われ、「天文を曉り、好く兵を談じ、南遷を倡⁽¹⁴⁾」えたとか、「これを星象に驗し、これを曆數に稽るに、天命已に去る。惟だ南遷せば以て難を紓む可きのみ。」と述べた⁽¹⁵⁾とされ、徐有貞の議論には特別な根拠はなく、得意の天文占いに基づくものであった。このような徐有貞の論じ方は、それを排斥したい者には格好であったろう。かくて臣下の間では北京死守の方針が立ったものの、なお禁中に疑懼があり、金英は孫皇太后を説得してその支持を取り付けなければならなかった⁽¹⁶⁾。かくて京師死守に向けて、付近の衛所から兵員が招集された外、勤王の兵がかき集められ、エセンの軍が一〇月に京師に接近する頃までには、総勢二二万の大軍が京師に集結したのである。ところがこれで南遷論が払拭されたわけではなかつ

た。オイラート軍が太上皇帝（英宗）を擁して北京に迫ると、再度蒸し返されたのである。葉盛の『水東日記』巻七、金英闡南遷議の條には、

己巳虜騎之薄都城、朝野汹汹、廷議有以南遷爲言者、蓋亦寇準所非王欽若之議耳。太監金英、一日宣言、□衆死則君臣當一處死爾。有以遷都爲言者、上命必誅之。衆心稍定。明日、監察御史涂謙上疏極論茲事、因又諭旨禁飭焉。

とあり、『國權』正統一四年一〇月癸丑の條には、

朝議如沸、多主款。兵部尚書于謙獨抗言曰、社稷爲重、君爲輕。戒邊將毋中計。翰林侍講徐理好言天象。入對、言紫微・中宮皆有變、宜反南都。太監金英叱之。諸臣相軋未定、多遣其私重歸。謙慟哭廷諍曰、京師天下本、宗廟社稷山陵寧此、百官萬姓帑藏廩庾萃此。此而不守、去欲安之、今日足一動、明日大事去矣。且虜乘勝驕、實不足畏也。上善之曰、其聽謙處分。金英宣于衆曰、死則君臣同耳。有議遷者、上誅之無赦。于是、朝議始一。とある。ここから、北京死守は臣下の絶対的な支持を得ていたわけではなく、于謙、金英等が身を挺して説得に当たり、皇帝名において禁圧せねばならない程、南遷論は心情的な支持を得ていたことが分かる。寧ろ徐有貞がそのような不安な気持ちを代弁していたと言つてよい。明廷内外は北京に留まることへの抜き難い不安で覆われていたのであり、決して南遷論は妄言ではなかったのである。明朝の京師は永樂以降、南京と北京の間で彷徨い続け、正統六年にやっと北京に定都されたことを考えれば、土木の変はそれから僅か八年後のことであり、徐有貞の提議は突飛なものではなかったと言えよう。

この南遷論議を通して見ると、この時期、明廷をまとめられる人物の不在が感じ取れる。当時の明廷においては孫皇太后が最高の權威であり、周囲には兄弟で錦衣の官たる孫繼宗等が付き従い、独自の情報収集が可能であり、明廷内部における權力闘争にその威力を振るえたとしても、外廷で処理される諸問題に明確な方向を示して、明廷をまとめていくということになれば、その経験に欠け、難しかったのではなからうか。また閣臣・宦官・廷臣を見ても、王振という強引な牽引者を失って、集団指導体制の様相を態していた。救国の英雄と評される于謙は対オイラート強硬派で、兵部侍郎・尚書として軍政面で辣腕を振るったことは確かであるとしても、明廷の求心力にはなれなかった。結局、明廷は強力なまとまりの核を失ったままオイラート軍の北京進攻を迎えたのである。

三、郕王監国と皇太子擁立——新体制への始動——

土木の変において現皇帝たる英宗が拉致され、側近中の側近王振が戦死したことにより、求心力の低下に苦しむ明廷では、新たな意志決定ラインの構築を急務としていた。これは英宗を手中にして硬軟取り混ぜた揺さぶりを仕掛けるエセンへの対抗上も必要なことであつた。本節では、新帝擁立の前段階として行われた郕王監国と皇太子擁立について検討する。

英宗は親征の前日、異母弟郕王に居守を、駙馬都尉焦敬にその輔佐を命じた。未だ立太子がなされていないからである。しかしこれは特段彼らに権限を与えたということではなく、単なる留守居役であつた。⁽¹⁷⁾従つて土木の変後、早急に英宗の代行を務める立場の人物はいなかった。変後、英宗拉致の状況が次第に明白になり、早期奪還

表①

出生順	王号・名前	生母
一	見濬（見深） （のちの憲宗）	周貴妃
二	德莊王見濤	萬宸妃
三	皇子 見湜	萬宸妃
四	許悼王見濤	王惠妃
五	秀懷王見澍	高淑妃
六	崇簡王見澤	周貴妃
七	吉簡王見浚	萬宸妃
八	忻穆王見治	萬宸妃
九	徽莊王見沛	韋德妃

の見通しもなくなると、一八日、孫皇太后は暫時郕王に百官を取りまとめて監国するよう命じた。孫皇太后は郕王に、「國家庶務以て久曠すべからず。今、特に郕王に勅して暫くその事を總べよ。」と勅し、また廷臣にも「爾各衙門合に大小の事務を行うに、それ悉く郕王に啓し令を聽け。」と勅した。⁽¹⁸⁾これにより、郕王は単なる居守の立場から、監国に権限が強化された。孫皇太后は自らの指揮下、郕王中心の政務処理態勢を発動させたのである。これと同時に明廷は、皇帝の代行者たる皇太子の選出・擁立を急いだ。初めから新帝擁立に向かわなかった理由は、ひとえに英宗が生存していたからであり、英宗の錢皇后に未だ子供がなく、皇太子の冊立がなされていないからである。英宗には九子（表①）があった。

この中で正統一四年八月の土木の変以前に出生していた皇子は僅かに三人で、周貴妃が生んだ第一子見濬（のち見深）、萬宸妃が生んだ第二子見濤及び第三子見湜である。そこで八月二〇日、孫皇太后は聖旨を出して、窮余の策として英宗の庶長子見深を皇太子に任じるよう指示した。しかし、当時数えて僅か三歳の見深に政務が取れるわけはなかった。孫皇太后は監国郕王に見深の輔佐を命じた。二二日、「皇太后、天下に詔すらく、：臣民に主無きは可ならず、これ皇庶子三人の中において、その賢にして長なる者見深を選び、立てて皇太子正位東宮と爲さん。仍お郕王に命じて輔代總國政と爲し、天下を撫安せしめん。」との詔を出して、見深を皇太子とし、郕王をその輔佐として國政を統べさせることにした。⁽¹⁹⁾孫皇太后はこの皇太子見深、監国郕王の形で、当面の難局を乗り切ろうと

したわけであるが、英宗を押さえるエセンが外に控え、明廷内を取りまとめていくには、暫時の措置でしかなかった。ここに新帝問題が浮上する。

四、襄王推戴への策動

『英宗實錄』によれば八月二九日、文武百官は「聖駕北狩し、皇太子幼冲、國勢危殆し、人心汹湧す。古に云う、國に長君有らば社稷の福なり。」と、孫皇太后に新帝擁立の決断を迫り、孫皇太后もその要請に応えて、郕王を皇帝に擁立するよう命じ、郕王もこれを受諾したことになっているものの、その間の経緯を伺うことはできない。一体、皇太子見深、監国郕王体制から新帝景泰帝、皇太子見深体制にスムーズに移行したのであるうか。その実態は、甚だ屈曲したものであった。八月二二日体制の問題点は皇太子が幼すぎて、監国が輔佐をするとは言え皇帝代行たり得なかったことにあり、ここに新帝擁立問題が浮上してくる。新帝候補としては、英宗の子供達の中に適当な候補がいらない以上、英宗のただ一人の兄弟で、異母弟たる郕王が最有力であつておかしくはなかった。しかも当時郕王は監国として皇太子を後見し、孫皇太后を後ろ盾として明廷政務を取り仕切っていた。ところが、この時に当たつて、臣下の衆望を集めたのは、洪熙帝の第五子襄憲王瞻墻（以下、襄王）であつた。『明史』卷一一九、諸王四、襄憲王瞻墻の條には、

英宗北狩、諸王中、瞻墻最長且賢、衆望頗屬。太后命取襄國金符入宮、不果召。瞻墻上書、請立皇長子、令郕王監國、募勇智士迎車駕。書至、景帝立數日矣。英宗還京師、居南內、又上書景帝宜旦夕省膳問安、率羣臣朔

景泰政權の成立と孫皇太后 荷見

第八十二卷 三七

望見、無忘恭順。英宗復辟、石亨等誣于謙・王文有迎立外藩語、帝頗疑瞻墻。久之、從宮中得瞻墻所上二書、而襄國金符固在太后閣中。乃賜書召瞻墻、比二書於金滕。

とある。また王鴻緒撰『明史稿』もほぼ同文で、土木の変後、襄王に衆望が集まり、孫皇太后も擁立を働き掛けたが、失敗に終わった。かつ、景泰帝の即位以前と、英宗（当時の太上皇帝）の帰還後に一度づつ、合計二度に互って襄王が孫皇太后に奏疏していることが分かる。また王鴻緒『明史稿』が参照したと言われる萬斯同撰『明史』卷一五四、諸王下、襄獻王瞻墻の條には、

英宗北狩。王上疏慰皇太后、請令太子攝位、急發府庫、募死士、以圖迎復。疏至景帝、已即位、遂匿不以聞。

景泰中、又奏疏太后、問英宗起居、及勸景帝朝南宮、景帝不能從、亦不使太后知也。英宗復辟、小人方誣少保于謙等、謀立襄王、謙等既獲重罪、會帝得王疏宮中、覽之感動、坦然不以疑王。

とある。こちらでは土木の変直後の襄王擁立には触れてないが、景泰帝が即位する以前と、英宗の帰還後に一度づつ、合計二度に互って襄王が孫皇太后に上疏していることに違いはない。これら『明史』・『明史稿』の記事は何を根拠に書かれたのであろうか。孫皇太后の兄弟孫繼宗が監修を務めた『英宗實錄』の記述は大変抑制的で、英宗の皇統問題、孫氏一族に関するネガティブな情報を一切載せない。そこで注目されるのが焦竑撰『國朝獻徵錄』⁽²¹⁾卷二に収録された二つの襄王伝である。一は「襄王傳」、一は「襄憲王瞻墻」である。そしてこの二伝とも『吾學編』より収録したとするが、記述に相当の差異がある。まず「襄王傳」には、

襄王瞻墻、…景泰三年、乞得山地百頃。奪門時、石亨等欲殺於謙・王文、謂謙等通奄王誠、盜金符迎王。英宗

因詔王來朝。

とあり、「襄憲王瞻墻」には、

襄憲王瞻墻、…天資明睿、通詩書及春秋。…土木之役、車駕北狩、王兩上疏慰皇太后、乞命皇太子、居攝天位、急發府庫、募勇敢、以圖迎復、仍訓諭邸王、盡心輔政。章上時、景帝立八日矣。英宗復辟、得其奏於宮中、覽之感歎、手勅令王入朝。

とある。両伝の違いは、前者においては英宗が襄王を京師に呼び寄せた理由が不明であるが、後者においては土木の変時の事情から説き起こしてその理由が明瞭であることである。また、前者では襄王が何度上疏しているか不明であるが、後者では二度上疏したことが分かる。もっとも、後者の二度は景泰帝即位時のこととなっているところが、『明史』の記述と相違するところである。両文の差異はかなり大きいと言わざるを得ない。周知の通り、『吾學編』は嘉靖二年の進士で、兵部尚書にまで至った鄭曉（一四九九―一五六六）編で、隆慶元年に刊行されたものであるが、現存の『吾學編』同姓諸王傳卷三、襄王の條と比較してみると、前者と一致する。後者が果たして『吾學編』からの抜粋であるかは後考に待つしかないが、前者の文章が不明瞭なところから、『吾學編』に異本の存在を想定できるかもしれない。『國朝獻徵錄』が編纂された萬曆年間以前において、諸王について記載している書で現存が確認されているものは、萬曆一八年頃できた王世貞（一五二六―一五九三）撰『弇山堂別集』と前掲の『吾學編』である。『弇山堂別集』の記述は簡略であり、手掛かりとにならない。ここで考えるべきは、萬曆年間に一度試みられた明史編纂との関連である。これは閣臣陳于陞の提起で萬曆三十二年三月に始まり、陳于陞の死去後、萬曆三十五年六

月、中断して終わった。この編纂活動は中断されたとは言え、官主導で広範な取材が行われ、帝后の本紀、志、伝の稿本が残されたと見られ、その一部は現存する。そして『國朝獻徵錄』の撰者焦竑もこの編纂活動のメンバーであった。この編纂活動からは多くの編纂物が副産物として生まれたが、『國朝獻徵錄』もその副産物なのである。

従って『國朝獻徵錄』所収の資料の多くはこの編纂活動の折に集められたと考えてよい。⁽²²⁾

もう一つ参考になるのが、何喬遠撰『名山藏』⁽²³⁾である。何喬遠は萬曆一四年の進士で、崇禎年間、南京工部右侍郎にまで至った人であるが、⁽²⁴⁾萬曆二二年当時、禮部侍郎の地位にあり、この編纂活動を熟知していたはずで、『名山藏』もその影響を多分に受けているであろう。その『名山藏』卷三九、分藩記四、襄憲王瞻墻の條に、

帝北狩、其時諸王中、王最長親且賢。朝議以國家有故、非長王無以填之。謀迎立王子。既不果、邸王攝。王上書皇太后、請立睿帝太子、急發府庫、募勇敢士迎鑾、而令邸王加意監國之政。而邸王隱之、不以聞太后、書至已立爲皇帝矣。邸王卽位、又上言、陛下誕登寶位、非從上皇冊封、若稍失臣節。宜且夕遣使視膳、朔望率羣臣問安、以不失恭順之意。睿帝復辟、于謙・王文坐謀迎王子誅、疑王與有謀、而王實不知。久之、從宮中得王所爲二書、賜書遺王比於金滕。

とあり、『國朝獻徵錄』に比して遥かに詳細な内容となっており、擁立問題にも触れているが、襄王を立太子するという記述は、襄王が親王であることを考慮すれば辻褄の合わない話であり、撰者が新帝擁立問題と混同したのであろう。『明史』編纂においては『名山藏』、『吾學編』⁽²⁵⁾等が参考にされたので、萬曆修史が『明史』の当該記事に及ぼした影響は小さくない。つまり現存史料だけを見ても、襄王擁立を巡る上書については、明後期には半ば公に

されていたのである。また、朱勣美撰『王國典禮』⁽²⁶⁾卷一、聖訓の條には、

英宗與襄憲王書、侄皇帝御名奉書叔父襄王殿下、承諭具悉尊意所以惡景諱之憎分、而喜侄之復位、及襄嘗有陳言・慰安二章。初未曾達皇太后。所蓋爲景諱之所蔽匿也。今已於景諱宮中檢而得之。侄親覽之、再三深見叔父忠愛之誠、…此二章、亦即金賸之書之比也。皇太后聞之感嘆不已。

とあり、書の内容自体は『英宗實錄』天順元年三月丙子の條に見える。また、襄王は天順四年四月に京師に朝覲するが、⁽²⁸⁾『王國典禮』の同條には、「皇帝書致叔父襄王」として『英宗實錄』天順四年四月壬申の條の全文を含めて、英宗が襄王に与えた書の内容が収録されている。さらに英宗が襄王に与えた「峴山賦」、「漢水賦」、「襄陽四景歌」が収められているが、これらは実録には見えない。『王國典禮』凡例によれば、本書は祖訓、実録、会典、集礼、條例諸書から関係記事を集め、原文のまま収載したとのことである。英宗の襄王への書は、実録も参考にされたであろうがもともと原物に近いものから収録した可能性が高い。

以上の史料からすると、土木の変後、孫皇太后の要請に対して襄王は陳言の上書をし、英宗が帰還して南宮に幽閉されると、孫皇太后に慰安の上書を行った。しかしこの二本とも景泰帝により留め置かれ、孫皇太后に達することとはなかった。奪門の変後、この二書が英宗によつて発見されることで、奪門の変に絡んで襄王に懸けられた外藩擁立疑惑は晴れ、襄王は英宗の無上の信頼を得ることができたのである。従つて、『國朝獻徵錄』所収の『吾學編』⁽²⁹⁾「襄憲王瞻墻」の記述は、上書の時期・内容に混乱があると見るべきである。

また襄王府は湖広襄陽府という京師から遙か遠隔地にあり、明廷は孫皇太后聖旨を逐一全土に頒布していたとし

ても、明廷の動向が得られるまでのタイムラグは小さくなかったと見られる。例えば南京翰林院侍講學士周敘が、八月二三日の孫皇太后聖旨を踏まえて、九月五日までに郕王に上啓しているが、北京・南京間という首都・副都間の情報の往来でも二週間の時間を要したのである。『明史』・『吾學編』「襄憲王瞻墻」の、襄王の上書が明廷に到着した日が、「景帝立ちて數日」、「景帝立ちて八日」という表現、またその内容が八月二三日の孫皇太后聖旨以降の状況を踏まえたものであることから、襄王の上書は京師より使者が発してから、最長往復三週間前後で京師に届いたものと推定される。これは大変な早さと言って過言ではない。さらに襄王上書の内容についてであるが、『吾學編』「襄憲王瞻墻」では、皇太子が天位を摂し、郕王がそれを輔政すべきことが強調されているが、皇太子見深、監国郕王の組み合わせはすでに布告されたことであり、なぜこれを殊更強調するのか、ということになる。時間・内容・英宗の反応といった点を総合して考えれば、襄王は一本目の孫皇太后宛上書において、即位の誘いを婉曲にかつ明確に断り、英宗の庶長子を皇太子として盛り立て、英宗奪還を期すべきことを主張したと見てよからう。単に北庭からの英宗奪還や、南宮幽閉中の英宗に礼を尽くすべきを主張する上奏に事欠かなかった当時を考えれば、これでこそ襄王は英宗の信頼を得ることができたのである。

五、襄王推戴の背景と要因

ではなぜ襄王に即位の働きかけがなされたのだろうか。『明史』では、「諸王中、瞻墻最も長にして且つ賢」として、『名山藏』では、「諸王中、王最も長親にして且つ賢」として、朝議において衆望を集め、帝位継承者に浮上し

たということになる。しかし「長にして賢」という表現は言わば紋切り型であり、どれだけ実情を反映しているかは別問題である。実際、当時は洪熙帝の第二子が存命であり、襄王は諸王中最長ではない。従って本節では襄王推戴の要因を、襄王（府）と明廷の關係で探ってみたい。

当時、諸王には洪武帝、永樂帝、洪熙帝及び宣德帝の流れを汲む諸王があり、それを英宗からの近さで見ると、洪熙帝の諸子と宣德帝の庶子郕王が挙げられる。洪熙帝には十子（表②）があった。その内、張皇后の子が三人、李賢妃の子が三人、張順妃の子供が一人、郭賢妃の子供が三人であった。永樂二年八月、洪熙帝が即位し、一〇月、長子瞻基を立太子すると、既に死去した第四子を除く諸子八人が藩王に封じられた。洪熙帝は即位後一年にも

表②

出生順	王号・名前	生母	卒年
一	宣宗瞻基	張皇后	宣德一〇年
二	鄭靖王瞻埈	李賢妃	成化二年
三	越靖王瞻墉	張皇后	正統四年
四	靳獻王瞻垠	李賢妃	永樂一九年
五	襄憲王瞻埜	張皇后	成化一四年
六	荆憲王瞻瑋	張順妃	景泰四年
七	淮靖王瞻瑋	李賢妃	正統一一年
八	滕懷王瞻埜	郭賢妃	洪熙元年
九	梁莊王瞻圻	郭賢妃	正統六年
一〇	衛恭王瞻埜	郭賢妃	正統三年

満たない洪熙元年五月に薨り、翌六月に宣德帝が帝位に即いた。この後、二四年余を経た土木の変後まで存命であった洪熙帝の諸王は、第五子襄王以外に第二、第六子がおり、存命の洪熙帝諸王中だけでも襄王は「最長」でなかった。また襄王が「賢」王であるという条件を見てみると、『明史』巻一九、諸王四、襄憲王瞻埜の條に、「莊敬にして令譽有り。」とあり、『國朝獻徵錄』所収の『吾學編』「襄憲王瞻埜」には、「天資明睿にして、詩書及び春秋に通ず。」とあり、『名山藏』卷三九、分藩記四、襄憲王瞻埜の條には、「書を讀み、詩に通ずるも、尤も春秋に長ず。」とあり、儒学への造詣の深さを指しているように思える。これを、就藩後

度々人を杖下に殺すなど人格的な問題があつた第二子と比べると、管見の限り襄王には比較されるべき醜聞はない。ただ、學問的素養は絶對的な評価となり難い。

そこで、襄王と明廷の関わりを検討してみたい。政局との関わりで襄王の名が登場する最初は、洪熙帝逝去時である。この時、皇太子は南京に居守しており、第二子と襄王は張皇后の命で北京に監国して、皇太子の帰還を待た⁽³⁰⁾た。次いで宣德帝が即位してすぐの宣德元年八月、永樂帝の第二子高煦が帝位を狙つて策動しているとして、宣德帝は第二子と襄王に北京居守を命じて、自ら反乱鎮圧に出動した⁽³¹⁾。この当時なお第三子が存命であつた。襄王が帝位継承候補者として初めて噂されたのは、宣德帝逝去時であるという。当時、既に皇長子祁鎮は皇太子位にあつたものの、数えて僅か九歳であつたことから、明廷では襄王の名が取り沙汰された。この時も第二、三子は存命していた。『明史』卷一二三、后妃一、仁宗誠孝皇后張氏の條に、

宣宗崩、英宗方九歳、宮中訛言將召立襄王矣。太后趣召諸大臣至乾清宮、指太子泣曰、此新天子也。羣臣呼萬歲、浮言乃息。

とあり、『明史稿』后妃上、仁宗誠孝皇后張氏の條には、

后生宣宗及越王瞻墉・襄王瞻埜。瞻埜即宣宗崩時、宮中訛言、太后欲取金牌召立者也。とある。『明史』に先んじて順治一〇年頃に完成した『國權』宣德一〇年正月乙亥の條には、

宣宗賓天、皇太子年九歳、皇太后取金符入内、或謂立襄王。太后聞之、立至乾清宮、携太子召閣臣泣曰、此新天子也。閣臣伏調呼萬歲、羣臣隨之、浮議乃息。

としている。これ以前は管見の限り『名山藏』まで溯り、卷三〇、坤則記、張皇后の條に、

宣宗崩、英宗方九歲、太后謂國福長君、欲召立襄王、不果、乃除罷。

とある。『明史』と『國權』は、張皇太后が太子襄王即位の噂を打ち消して、英宗を強力に推して皇帝としたという説であるが、『名山藏』では、張皇太后自身が襄王の登極を支持したものの失敗したという説である。そこで成化二年の進士、陸容（一四三六—一四九四）の『菽園雜記』卷八を見ると、

于公謙、王公文遇害時、以迎立外藩誣之。文稱冤、謙但云親王非有金符不可召、當辯之。時印綬、尚寶諸內官聞之、檢閱各王府符、具在、獨無襄王府者、衆皆危疑、不知其故。乃問一退任老內官。云嘗記宣德間、老娘娘有旨取去、但不知何在。老宮人某尚在、必知其詳。遂往問之、云是宣廟賓天時、老娘娘以爲國有長君、社稷之福、嘗欲召襄王、因取入。後以三楊學士議不諧而止。符今在後宮暖閣中。老娘娘、張太后也。於是、啓太后求之、果得於其處。已積塵埋没寸餘矣。

とあり、『名山藏』の説を支持している。張皇太后は一時襄王の皇帝擁立に動きかけたものの、三楊の反対で思い止どまったということである。すでに皇長子が皇太子の位にあつたからである。幼帝たる英宗の即位はきわどいものであつたことが以上から伺われるが、それを支持するかどうか、張皇太后にとつても難しい選択であつた。

また張皇太后には孫皇后を快く思わない理由があつた。宣德帝の元の皇后で宣德三年に病弱で子供もなく、当時の孫貴妃と入れ違いで廢后された胡氏を、張皇太后は大変に哀れんで、内廷では常に孫皇后より上座に位置させ、手厚く保護した。孫皇后はそれを常に不満としていた。⁽³²⁾さらにこれにはもう一つ考慮すべき問題がある。英宗は果

たして孫皇后の実子であるのかという疑念である。宣德帝の貴妃であつた孫氏は、宮人の産んだ子供を密に取り込んで実子とし、宣德帝の寵愛を利用して、子の無い胡氏を皇后の位から引きずり下ろし、皇后の位を手に入れたということである。そしてこの出生不明の子が後の英宗であるという。『明史稿』后妃上、宣宗恭讓皇后胡氏の條には、

后無過被廢、天下聞而憐之。宣宗後亦悔焉。天順六年、孫太后崩、錢皇后爲英宗言、帝非孫太后出、且胡后賢而無罪廢爲仙師。其歿也、人畏太后、殮葬皆不如禮、因勸復其位號。…人終不知英宗生母誰氏也。

とあり、これを溯ると『名山藏』卷三〇、坤則記、錢皇后の條に、

孫太后子英宗、無敢言者。太后崩、后具言之、并爲胡廢后白枉、上莫知母宮人爲誰竟。

とあり、『明史稿』の説は『名山藏』の系統を受けていることが分かる。この真偽はともかくとして、皇后位争いにおける孫氏の強引な態度が内外廷で相当畏怖されていたことは、容易に想像がつく。孫皇太后の逝去後、錢皇后は亡き胡氏を皇后位に復すべきを主張し、英宗は李賢に諮つて皇后位を贈つた。⁽³⁴⁾ 端無くも孫皇太后の死を待つていたかのように、孫氏への不満が噴出したのである。この説に多少なりとも真実があるのなら、張皇太后がこのような孫皇后を支持するかどうかは、実に微妙な問題であつたのである。

これに続き、土木の変後の政局の中で、襄王は帝位継承の重要な候補となつたのであるが、従前からの経緯を見れば、決して唐突に浮上してきたわけではない。また襄王が異母兄の第二子、同母兄の第三子よりも衆望を集めていた点から見れば、襄王はそれなりの人望を備えていたと言ふべきである。しかし、もう一点、奪門の変と襄王府

の關係を分析しなければならない。天順元年（景泰八年）の奪門の変の遠因は、景泰帝の皇太子すげ替え事件に求められよう。即位後の景泰帝は息子見済を皇太子位に即けようと画策し、景泰三年五月、廷臣の積極的な支持がいまま、皇太子の見済を沂王に格下げし、見済を皇太子に即けた。ところが、景泰四年一月に見済が死ぬと、皇太子選びは暗礁に乗り上げてしまった。臣下の中には沂王を再び皇太子に復するよう上奏する者もいたが、景泰帝はこれを厳しく肅清した。新たな立太子を見ないまま、景泰七年一二月、景泰帝は不豫となった。年が明けた景泰八年正月になると、皇太子を立てるよう求める声が廷臣から強く起こったが、その解決を見ない正月一七日に奪門の変が起こり英宗が復位した。その直後、于謙・王文等は襄王の世子を皇太子にすべく画策したとして突如逮捕され、処刑或いは流刑・削籍された。この事件の真相は政変に絡むために不明瞭であるが、その問題点を本稿の観点に引き付けて言えば、この時は襄王自身ではなく、その世子の立太子計画があつたとして、多くの高官が処分されたことである。ここでは事の真偽には立ち入らず、襄王の世子が焦点となったことに注目したい。これは皇太子位が問題になったからであるが、襄王自身が焦点となつていない以上、必ずしも襄王の「賢王」とであるという属性は通用しない。こうしてみると、襄王に次いでその世子が焦点となった要因として、血統の問題が挙げられるのではないかと推測される。襄王は宣德帝、第三子とともに張皇后の子である。その血統の正しさが、襄王自身の賢王振りと相俟つて廷臣を引き付けたのではなからうか。

六、郕王即位と孫皇太后

明廷からの即位要請に対して、襄王は皇太子が帝位を摂し、郕王が監国としてそれを盛り立て、英宗奪還を目指す旨の返書を孫皇太后に上した。これから推測して、襄王に対する即位要請は八月二日かその直後に行われた可能性が高い。しかし、これが襄王の返答も待たず、一転して郕王の即位に至った原因はどこに求められるのだろうか。本節ではこの問題を孫皇太后及び廷臣との関係で考える。

まず明朝には帝位は皇帝↓皇長子↓皇長孫と受け継がれる継承原則があり、これに従えば、土木の変後の場合、皇庶子ではあっても英宗の第一子である見深（当時は見濬）を帝位に即ければよい。しかし現実には相違した。この明朝前半期の帝位継承はまだ不安定であった。土木の変までの八一年間を見ても、懿文太子の死に動揺した洪武帝が、自らの後継を懿文太子の世子允炆（建文帝）にするか、自らの第四子で対モンゴル戦で勇名を馳せていた燕王にするかで半年近くも悩み、臣下の上奏でやむなく後継を允炆に決定した例、建文帝即位後、削藩政策で追い詰められた燕王が、建文帝を打倒して帝位に即いた靖難の役⁽²⁵⁾、宣德帝即位に際して永楽帝の第二子高煦が討ち滅ぼされた例と、原則はあくまでも原則に過ぎず、その時々⁽²⁶⁾の政治状況で容易に流動化してしまうものである。そしてこの問題は土木の変直後という特殊な状況下では尚更難しい問題であったろう。

皇族の最有力者孫皇太后の発言力は、土木の変によって「実子」英宗が拉致されてしまうと、帝位という拠り所を失って低下したと見てよい。それでも英宗の庶長子を立太子することに成功したが、新帝問題において、廷臣等

が襄王をかつぎ出そうとすると、その意向に従わざるを得なくなる。さすれば、孫皇太后にとって、この皇太子が権力の唯一の保証ということになるが、郕王が帝位に即くと、この皇太子すら更迭されてしまうのである。ではなぜ孫皇太后は襄王の返事を待たずに、郕王の即位を認めたのだろうか。それは当時の政情不安の中で、襄王が郕王よりも血統・名声、及び恐らく年齢的な面で廷臣の信頼感を勝ち得ていたが故に、孫皇太后からすれば、襄王は自らの立場を相対化しかなない存在に映ったのではなからうか。襄王に引き比べ、宣德帝庶子であり二〇歳を越えたばかりの郕王の方が遥かに御し易い存在に見えたとしても不思議はない。

では、このようにして孫皇太后が郕王の即位を支持したとしても、廷臣はなぜ郕王を支持せざるを得なかったのだろうか。これは一にも二にも当時の明廷が直面していた内外の危機であろう。つまり、外側からは英宗を押さえたオイラート軍の北京進攻が目前に迫っており、一方明廷内部は求心力を失って政情不安に覆われていたがゆえ、目前にいない襄王よりも監国として意志決定の中核にいた郕王に支持が集まっていたのではなからうか。同時代人である彭⁽³⁶⁾時の『彭文憲公筆記』では、郕王即位時のことに触れて、

八月二十九日、予居憂、忽校尉至門、宣喚入朝。有令旨、着商輅・彭時與陳循每同辦事。時具啓辭、不允、令專心辦事、內臣促送入內閣乃去。是日、文武百官具本伏文華門、請郕王即位。王再三辭讓。尚書王直・于謙・陳循等咸以宗廟社稷大計爲言、力請不退。會太后命亦下、乃許以九月初六日即位。蓋是時人心危疑、思得長君以彌禍亂。故不得已爲此舉、亦事之變也。

とあり、「已むを得ず此の舉を爲す」という所に、郕王擁立に動いた臣下の思いが込められているように思われる。

即位後の郕王が英宗奪還の動きを嫌ったり、襄王の上書を握り潰したことから推して、当然郕王にも野心があったろうことは言うまでもない。

七、景泰帝とその政權

以上の考察から、景泰帝は必ずしも廷臣の積極的な支持を得てはおらず、景泰帝の明廷掌握力は極めて限られたものとなる。景泰政權は当初どのように組織されていたのであろうか。本節では変後から同年一〇月までの人事を通してその特色を探ってみたい。

土木の変においては、親征に扈從した多くの高位の官僚が戦没、または捕虜となった。その中でも宦官王振の戦没は明廷の意志決定の有り方に大きな影響を及ぼした。また戦没者の中には尚書が二名、侍郎が二名、閣臣が二名、つまり曹鼎と張益が含まれ、それを品級で見れば、正二品一一名、正三品一四名、正四品一五名、正五品一四名、従五品一六名、正六品一六名、従六品一二名、正七品一〇名、従七品一六名、正八品一一名、従九品一二名が確認される。⁽³⁷⁾ 変後の明廷では、郕王監国体制の形成と新帝選びの最中の八月二三日、権力の庇護を失った王振一党が激高した廷臣によって肅清された。これは正統から景泰への移行期で起こった唯一の肅清事件で、錦衣衛指揮馬順・内官毛貴・王長隨等が殺害され、王振の姪である錦衣衛指揮王山等の一族も族誅・籍没となった。一方、宦官で王振に代わって郕王、孫皇太后に侍する金英・興安等王振時代に影の薄かった宦官が台頭した。彼らは于謙とともに南遷論を抑え、于謙を強く支持した。⁽³⁸⁾ 王世貞は『弇山堂別集』卷二四で、「この時に當って、内に金英微く、外に

謙微かりせば、幾んど揺動す。而れども史は皆な載せず。」と評している。

文武官人事は、まず二〇日に、石亨を右都督に昇進させ、後軍都督府事を掌して、大營の操練を管せしめ、駙馬都尉焦敬に神機營を、忻城伯趙榮に三千營を、それぞれ管せしめたことに始まり、二一日に、文官のトップを切つて于謙が兵部左侍郎から兵部尚書に昇進している。さらに中央政府の文官人事の特徴を、内閣・六部尚書・都察院左、右都御史・正三品以下に分けて概観してみると、内閣(表③)においては親征軍発動当時、曹鼎・張益・陳循・苗衷・高穀の五人が在職していたが、土木の変で曹鼎・張益の二人が戦死した。八月二三日、陳循と高穀の品級を陞し、同二九日、高穀の推薦で翰林院修撰の商輅と彭時を入閣させた。六部尚書(表④)では、土木の変で王佐と鄭瑩が戦死したが、前述のように兵部尚書には于謙が昇進、八月二二日、周忱が工部左侍郎から戸部尚書に昇進、同二六日、趙新が吏部右侍郎から尚書に、一〇月七日、陳恭が工部右侍郎から尚書(監理柴炭)にそれぞれ昇進した。その他は基本的に留任し、二七日、胡濙に太子太

表③ 内閣 土木の変後の異動

人名	土木の変以前	変以後
曹鼎	吏部左侍郎兼翰林院學士(内閣)	戦没
張益	翰林院侍讀學士(内閣)	戦没
陳循	戸部右侍郎兼翰林院學士(内閣)	戸部尚書兼學士
苗衷	兵部右侍郎兼翰林院侍讀學士(内閣)	留任
高穀	工部右侍郎兼翰林院侍讀學士(内閣)	工部尚書兼學士
商輅	翰林院修撰	新任
彭時	翰林院修撰	新任

傅を、王直に太子太保をそれぞれ加えた。なお、都察院左、右都御史では、八月二一日、俞士悦が大理寺卿から右都御史に昇進し、都察院を理めることとなった。このように内閣と六部尚書・都察院左、右都御史(正二品)の人事は鄭王の即位が決定する八月二九日までにはほぼ終了し、大勢としては旧臣の留任を特徴とし、

表④ 六部尚書 土木の変後の異動	
人名	土木の変後
吏部尚書	王直 留任（加太子太保）、趙新が吏部右侍郎から昇進
戸部尚書	王佐 戦没、周忱が工部左侍郎から昇進
禮部尚書	胡濙 留任（加太子太傅）
兵部尚書	鄭瑩 戦没、于謙が兵部左侍郎から昇進
刑部尚書	金濂 留任（福建出征中）、陳恭が工部右侍郎から昇進
工部尚書	石璞 留任（浙江出征中）、陳恭が工部右侍郎から昇進

表⑤ 邸王府異動表 ⁽³⁹⁾	
人名	異動前
儀銘	王府左長史（正五品）
楊翥	もと王府右長史（正五品）
俞綱	王府審理（正六品）
陸子才	王府良醫（正・従八品?）
欣堯敬	王府良醫（正・従八品?）
章文	王府判讀（従九品）
俞山	王府判讀（従九品）
その他審理副（正七品） 季亨等三人↓州同知（従六品）等の官	異動後
	禮部左侍郎（正三品）
	禮部右侍郎（正三品）
	太僕寺少卿（正四品）
	太醫院院判（正六品）
	太醫院院判（正六品）
	太常寺寺丞（正六品）
	鴻臚寺左寺丞（正六品）

昇進も官品から見て大きな上昇はなかった。また、正三品以下の人事は邸王監国期から即位以後九、一〇月と断続的になされた。これを官品の動き方で見ると、左遷も大拔擢も殆ど無い。

景泰帝と直接繋がりを持つ異動と言えば、邸王の即位に伴い、九月一二日、邸王府長史司が廃止され、旧邸王府官が異動したことである。所謂「潜邸恩（藩邸旧勞）」である（表⑤）。元来、王府官僚は中央官僚から見れば、忌避すべき閑職であることを考えれば、この異動・昇進は邸王府の官僚にとって僥倖以外の何物でもなかった。その上、大幅な官品の上昇を伴って中央官に異動している者がいるということは、景泰帝の力による。ではこの旧邸王府出身の官僚達は景泰帝の確固たる支持勢力となり得たであろうか。答えは否である。彼らのその後を見ると、儀銘は兵部尚書で没して

いるが、禮部侍郎から一旦南京禮部尚書に転出してゐる上に、兵部尚書には于謙がおり、儀銘は名目だけの存在でなかつただらうか。⁽⁴⁰⁾ 楊翥は禮部尚書に至つたが、事情は儀銘と同様であつたらう。⁽⁴¹⁾ 俞山は前述の易儲事件において、易儲反対の立場に立つてゐた。⁽⁴²⁾ 右の人々に比べて俞綱は景泰年間には兵部侍郎の地位を保ち、一時入閣を果たし、天順年間には左遷されたものの、南京禮部に留まるなど出世を重ねた方であるが、奪門の変以降も生き永らえたこと自体、景泰帝の支持基盤とならなかつた左証ではないか。⁽⁴³⁾ 以上から見ると、旧邸王府官僚の昇進は、景泰帝の恩恵に与つての出世であつても、景泰帝の権力基盤とはなり得なかつたのである。また、内閣と六部尚書・都察院の人事は景泰帝即位が決まる八月二十九日まで、ほぼ決定しており、景泰帝は変後の補充人事で組織された横並び的政策・執行集団の上に乗つたに過ぎなかつたのである。

おわりに——景泰政權の成立と孫皇太后——

本稿では、土木の変後、景泰帝が即位して景泰政權が成立するまでの明廷の動向を、孫皇太后との關係を軸にしつつ、即位後の動きも若干含めながら検討してきた。孫皇太后の明廷における權勢が確立するのは、正統七年の張太皇太后逝去からである。この時期は、永樂年間から明廷政治を切り回してきた三楊が相次いで亡くなり、閣臣の力が落ちる一方、太監王振一派の政局壟斷が始まるのであるが、英宗を擁する孫氏一族の權勢には到底及ばなかつた。逆に言えば、孫氏一族を脅かすものでないゆえに、王振は政局を壟斷できたのであらう。ここにこの時期の外戚と宦官の關係が見えてゐる。孫皇太后はその兄弟をすべて錦衣等の官に就けるなど、身内の引き立てに余念がな

かった。しかし、土木の変で英宗が拉致されると、必然的に孫皇太后の立場も著しく脅かされることになった。孫皇太后が英宗の庶長子見深を立太子したことは、孫皇太后の地位を維持する最低限の保証であった。変後の明廷は、皇帝という結束の核を失って、また引き続きオイラト軍進攻の脅威で、南遷論議に見られるように、極めて不安定な状態となっていた。孫皇太后は郕王を監国として見深を後見させつつ、明廷政務を仕切らせ、難局を乗り切ろうとした。この時、廷臣は宣德帝の同母弟で人望の厚い襄王に、新帝の期待を寄せていた。これには廷臣の間に、「実子」英宗を梃子に強引に皇后の地位にのし上がって来た孫氏一族に対する不快感がなかっただろうか。変後の状況下では、孫皇太后も廷臣の要望に譲歩せざるを得ず、襄王を湖北より呼び寄せることとした。しかしこれが一転して郕王の即位となった要因としては、襄王の意志を確認するまでに一定の時間が必要であり、北辺が急を告げている状況下では待てなかったという事情の外に、血統・人望・年齢などの条件に優れた襄王の存在が、孫皇太后の立場を相対化しかねない存在となっていたということがあろう。それに比較して郕王の方が遙かに御し易い存在だったことは言うまでもない。孫皇太后にとって、襄王を帝位に即かせることは決して望ましいことではなかったのである。かくて孫皇太后の庇護下、即位した郕王であったが、彼が率いた廷臣は、基本的に英宗の旧臣であり、景泰帝にはあまり大きな裁量権はなかった。この景泰帝を支えた英宗旧臣は景泰帝をどう見ていたのだろうか。彭時は廷臣が郕王を皇帝に推した行為は、やむを得ないことであつたとした。一〇月にオイラト軍が英宗を伴って京師に迫ると、動揺する廷臣に対して于謙は、「社稷を重きと爲し、君を輕きと爲す。」と言明していさめた。ここには、同じく景泰帝を支えなければならない旧臣の間に、個人としての英宗を重く見る立場と、王朝そのものを重

く見る立場が存在していたことが示されている。これは二者択一できるような問題ではなく、そこにこの時期の難しさが存在する。成立期におけるかくの如き矛盾は、景泰政権の基盤の弱さに繋がると同時に、孫皇太后の基盤をも弱めていたのではなからうか。かかる見方は、景泰から天順に至る時期を考える上で、基本とすべき視角の一つであろう。

註

(1) なお、英宗は年号により正統帝、天順帝とも呼ばれ、景泰帝は景帝、または廟号により代宗とも呼ばれるが、本稿では最も人口に膾炙している英宗、景泰帝の呼称で統一した。

(2) 趙毅、羅冬陽著『正統皇帝大伝』（遼寧教育出版社、一九九三年）、白新良、王林、楊效雷編著『正統帝・景泰帝』（吉林文史出版社、一九九六年）等は通り一遍的内容である外、随所に小説的レトリックが織り込まれている。

(3) 私は先に「明朝の冊封体制とその様態——土木の変をめぐる李氏朝鮮との関係——」（『史学雑誌』一〇四—八、一九九五年）において、土木の変直後の中朝関係について、北京（明廷）・遼東・漠城（李廷）の三点を結ぶ構造に着目すべきことを指摘したが、変後における明廷の政治変動

については、極めて重要な問題でありながら、副次的に触れるに留まった。

(4) 『皇明詔令』巻九、遺詔、宣德十年正月初三日。

(5) 明代の内閣については、山本隆義『中国政治制度の研究』（同朋舎、一九六八年）、王其桀『明代内閣制度史』（中華書局、一九八九年）、譚天星『明代内閣政治』（中国社会科学出版社、一九九六年）等参照。

(6) 山本前掲書、櫻井俊郎『明代題奏本制度の成立とその變容』（『東洋史研究』第五一卷第二号、一九九二年）参照。

(7) 宦官研究については、丁易『明代特務政治』（中外出版社、一九五〇年）、衛建林『明代宦官政治（增訂本）』（花山文芸出版社、一九九八年）等参照。

(8) 『皇明詔令』巻一一、太后遺詔、正統七年十月十八日。

(9) 『宣宗實錄』宣德一〇年二月丁巳の條。張太皇太后の

兄弟は生前に爵位を受け、皇后・皇太后外戚による封爵要求の先例となったが、靖難の役時の功績も評価されたと見られる。佐藤文俊『明代王府の研究』（研文出版、一九九九年）四二三頁参照。

(10) 『英宗實錄』・『國權』 正統八年七月戊午の條、『名山藏』卷六、臣林記、孫忠傳。

(11) 川越泰博『土木の変と親征軍』（『東洋史研究』第五二卷第一号、一九九二年）。

(12) 劉定之撰『否泰錄』によれば、一六日夜、京師に親征軍壊滅の報が齎されたようである。『英宗實錄』、『國權』では戦守をめぐる朝議も一六日に開かれたとなっているが、一七日であった可能性も排除できない。

(13) 『英宗實錄』・『國權』の正統一四年八月癸亥の條及び尹直『審齋瑣錄』卷一、陸容『菽園雜記』卷一、『明史』卷三〇四、金英傳等参照。

(14) 『國權』卷二七、正統一四年八月癸亥の條。

(15) 『明史』卷一七一、徐有貞傳。

(16) 『英宗實錄』・『國權』の正統一四年八月癸亥の條には「太監李永昌」とあるが、王世貞『弇山堂別集』卷二四、史乘考誤五により「太監金英」に改める。

(17) 『英宗實錄』正統一四年七月癸巳の條。居守事宜にお

いては、在京・在外の重大事はすべて英宗の行在まで使者を差し向けて判断を仰ぎ、その他の事項については、英宗の帰京を待って裁可を受けるとなっている。従って、郕王等にはいかなる権限もなかった。

(18) 『皇明詔令』卷二二、郕王監國內勅附、正統十四年八月十八日。

(19) 『皇明詔令』卷二二、立皇太子内詔附、正統十四年八月二十二日。

(20) 『英宗實錄』に曲筆の問題があることについては、間野潛龍『明代文化史研究』（同朋舎、一九七九年）、謝貴安『明實錄研究』（文津出版社、一九九五年）参照。

(21) 萬曆年間の刻本、萬曆四四年の顧起元の序がある。

(22) 李小林『萬曆官修本朝正史研究』（南開大学出版社、一九九九年）参照。

(23) 崇禎一三年の錢謙益の序がある。

(24) 柳詒徵『明史稿校錄』の何喬遠の伝（『明史編纂考』（臺灣學生書局、一九六八年）二九六頁）参照。

(25) 朱希祖「舊鈔本萬斯同明史稿跋、附有關萬斯同明史稿筆記」（前掲『明史編纂考』）。

(26) 伝不詳、『王國典禮』には奉勅督理宗學周府宗正とある。

(27) 萬曆四三年の序があり、萬曆四二年までの内容が含まれ、附記は天啓元年にまで及ぶ。

(28) 襄王朝覲に關しては『英宗實錄』天順四年三月乙亥、四月壬子、乙卯、庚午、壬申、乙亥の各條参照。

(29) 『名山藏』卷三九、分藩記四、鄭靖王瞻埈の條。

(30) 『明史』卷一一九、鄭靖王瞻埈の條。

(31) 『宣宗實錄』宣德元年八月己巳の條。

(32) 『明史』卷一一三、宣宗恭讓皇后胡氏、『明史稿』后妃上、宣宗恭讓皇后胡氏、『皇明書』卷一一、后妃內紀、恭讓章皇后、楊繼禮撰『皇明后紀妃嬪傳』章皇后胡氏紀の各條。

(33) 『明史』卷一一三、宣宗孝恭皇后孫氏、『明史稿』后妃上、宣宗孝恭皇后孫氏、『名山藏』卷三〇、則坤記、孫皇后、楊繼禮撰『皇明后紀妃嬪傳』章皇后孫氏紀の各條。

(34) 『名山藏』卷三〇、則坤記、孫皇后、『明史稿』后妃上、宣宗恭讓皇后胡氏の各條。ただし『英宗實錄』天順七年閏七月甲戌の條では、宣德帝が胡氏の廢后は若氣の至りであつたとの言葉を汲んでの復位であるとしている。

(35) 川越泰博『明代建文朝史の研究』（汲古書院、一九九七年）参照。

(36) 彭時は正統一三年の狀元で、翰林院修撰となり、翌年、

鄭王監国時に入閣した。

(37) 『英宗實錄』・『國權』の正統一四年八月癸巳、庚申、壬戌の條参照。

(38) 『明史』卷三〇四、金英傳。

(39) 『英宗實錄』正統一四年九月丙戌、戊子の條。

(40) 『明史』卷一五二、儀銘傳。なお儀銘は、王府左長史から禮部右侍郎になった。後に南京禮部尚書を経て兵部尚書となり、景泰五年に没した。

(41) 『明史』卷一五二、楊翥傳。なお楊翥は景泰三年に禮部尚書まで至って致仕した。

(42) 『明史』卷一五二、俞綱傳。景泰年間には吏部右侍郎にまで至っている。

(43) 『明史』卷一五二、俞綱傳。俞綱は景泰元年三月、兵部右侍郎を併任して入閣したが、三日で辞任している。